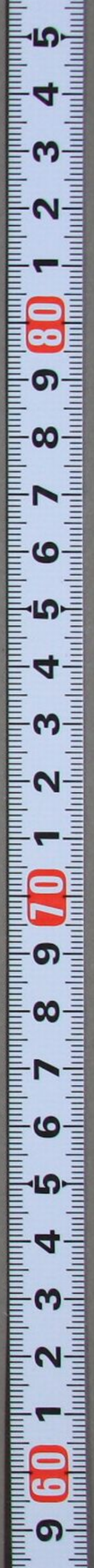


諸國里人談卷一





Handwritten text in blue ink on a piece of aged, textured paper. The text is arranged in vertical columns and appears to be a list or a set of notes. The characters are somewhat faded and difficult to read precisely, but they seem to include names or titles. The paper is mounted on a dark brown background, possibly the inside cover of a book.



昨日^キ旅^リ今日^ケ歸^ル明日^ア者^ケ末^ケ太^ク越^ス邊^ニ
 畿^ノ山^ノ之^ノ峯^ニ奈^ニ連^テ哉^ヤ空^ニ行^ク月^ノ乃^チ須^ク惠^ム
 能^ク白^ク雲^ト矣^ヤ陰^ニ而^{シテ}干^キ着^キ為^シ撥^リ巡^ル於^テ國^ニ
 新^ニ剝^リ柴^ト門^ノ肩^ニ艾^ト飛^レ錫^ト行^ク程^ヲ駕^カ下^リ
 少^ク六^ツ馬^ト士^ト与^テ作^ル干^ノ詔^ヲ知^ル新^ニ維^ル山^ノ紫^ト川^ト
 尉^ト末^ト川^ト洗^ヒ濯^リ于^テ媯^ニ温^ニ故^ニ吳^ノ竹^ノ之^ノ屬^ニ不^レ
 思^フ義^ト直^ト而^{シテ}也^ヤ飛^レ鳥^ト川^ト為^シ變^リ行^ク狀^ヲ而^{シテ}也^ヤ
 每^ク充^テ石^ト筆^ト先^ニ有^リ其^ノ蒼^ト坊^ト主^ト其^ノ草^ト稿^ト
 矣^ヤ書^ク賈^ニ二^ツ商^ト堂^ト設^テ之^ヲ而^{シテ}無^ク題^レ之^ヲ云^フ不^レ



直探有終其里又談一雨云
 東都俳林菊不山翁沾涼述

諸國里人談卷之一

一神祇部

- | | | | | | |
|------|-------|-------|------|------|-------|
| ○和布刈 | ○鹿伏神軍 | ○龍王祭 | ○人魚 | ○梅園社 | ○熱田的射 |
| 豐前 | 佐渡 | 於路 | 若狭 | 肥前 | 尾張 |
| ○諏訪祭 | ○吉備津釜 | ○飽海神軍 | ○直會祭 | ○龍地 | ○大頭社 |
| 信濃 | 備中 | 出羽 | 尾張 | 出雲 | 三河 |
| ○常陸帶 | | | | | |
| 常陸 | | | | | |



○筑麻手祭 近江

二 釋教部

○佛舍利 大和

○大觀音 泊瀬 鎌倉 江戸

○善光寺 信濃

○鬼押 伊勢

○高野祭笛 紀伊

○三猿堂 近江

○大佛 奈良 京都

○嵯峨釈迦 山城

○石羅漢 大豊後 和

○金印 相摸

○雷鳥 加賀

諸國里人於卷之一

菊園承山翁著

○神祇部

○和布刈

豊前國門司関早鞆明神乃宮前ハ海あり
是ハ石此階あり常ニ二十階付トモ有申免
え〜〜それ先トモ〜〜毎年十二月晦日乃子色
丑の刻の間ハ社人官殿の宝釵を胸ニあて石階
を登りて海中ニ入リ其時湖左右ハ詠トモ〜〜
海底乃和布刈一繰かり〜〜

瀨七十五供^{くわう}た氏^{うぢ}人の願^{ねがひ}を^{まか}し何^{なん}方^{かた}方^{かた}と^い極^{ごく}了^{りょう}
う^らま^まる^る自^し然^{ぜん}と^ある^る恒^{とこ}例^{れい}あ^らん^ます^し可^から
乃^{すなは}増^{ぞう}減^{げん}を^まし七^{しち}十^{じゅう}五^ごの^に日^{にち}毎^{まい}年^{ねん}の^に切^きき^りを^ます^しか^らの
一^{いっ}つ^ぱき^にも^も免^まれ^るそ^のれ^を奇^きなり^とす^べし

上^{かみ}諏^す訪^{ぼう}祭^{さい}神^{しん} 徒^た御^ご名^な方^{かた}命^{めい} 下^{した}諏^す方^{かた}祭^{さい}神^{しん} 八^{はち}坂^{さか}入^い姫^{ひめ}命^{めい}

上^{かみ}諏^す訪^{ぼう}女^{にょ}七^{しち}不^ふ思^し伎^ぎ有^あり

宮^{みや}歌^か 普^ふ賢^{けん}堂^{どう}の^に板^{いた}塾^{じゆく}め^め穴^{あな}あり^紙を^あそ^の口^{くち}に

う^らせ^は下^{した}の^をと^り北^{きた}三^{さん}重^{じゆう}の^に塔^{たう}を^ます^し其^{その}間^ま
一^{いっ}里^りあり

社^{しや}壇^{だん}雨^う 毎^{まい}日^{にち}己^{おの}の^に割^{わり}に^ある^る

根^ね入^い杵^き 根^ね八^{はち}方^{かた}へ^をひ^くこ^う

温^{おん}泉^{せん} 湯^ゆ山^{やま}より^ある^る新^{あたら}し^し乃^{すなは}ち^ち好^{この}き^ぎげ^げハ^ハ湯^ゆを^ある^る

氷^{こおり}橋^{はし} 冬^{ふゆ}諏^す訪^{ぼう}湖^こ氷^{こおり}の^に時^{とき}出^でる^ると^し杵^きを^ある^るそ^のあ

て^のち^ち後^ご人^{ひと}馬^ま水^{みづ}の^に上^{うへ}を^あ通^{とほ}る^る春^{はる}又^{また}杵^き後^ごを^あ

八^{はち}通^{とほ}ひ^ひと^と止^{とど}め

鹿^かの^の頭^{あたま} 祭^{まつり}の^の時^{とき}七^{しち}十^{じゅう}五^ご氏^し例^{れい}年^{ねん}た^たご^ごん

冨^ふ士^し移^{うつ}湖^こ 湖^こ上^{うへ}冨^ふ士^しの^の乳^ちを^ある^る 甲^か斐^{はい}一^{いっ}と^とを^ある^る其^{その}間^ま
子^こ山^{やま}を^ある^る有^あり

す^すこ^の海^{うみ}衣^えの^の所^{ところ}よ^よあ^らん^ます^し其^{その}間^ま冨^ふ士^しの^の浦^{うら}を^ある^る其^{その}間^ま

○ 芝祭

出羽國大泥村毎毎年四月八日芝祭と云ふあり其
中大き成池あり一山の山伏池の邊に臨んで祈
時々々の芝四五尺ほど裂て池あうりて漂
たたまを芝舟と云ふ其時寛く抱ひ移すと
半筆ハ少時猶豫を程なく奉のりたゞの
て地も愈々付り前のごとくぬぎの祭より
初と茶師佛と安を一山四十八ヶ寺みか山伏
持のともあり此日近玉りの石お群集す

○ 吉備津釜

海中玉吉備津釜と云ふ釜殿と云ふあり是れ大なる釜
あり祈願乃人吉出を伺ふ社人玉禰を
一の幣を釜中より法を修へ釜鳴動
それひき救十所よすい布たまを動かし
其音あり成就不成就病人快氣不快を考
る其あり吉備社海中賀陽郡の内板倉川の東俣前
の鬼

○ 廉仗神軍

佐波國鹿伏明神かのけの毎年二月九日大雨風ありて
夜に入ると大ききあまきゆぐいより静り翌十日極老て
晴天ありて例年多るん土俗に秋ハ神軍あり
といふことと戸出と七尺必就きりあまき北日社きたひら
の多しよ媽ははしき乃矢の根敷あり矢矢かりまゝか
あつ矢をどさるゝの秋ありて大さ常の葉の根
のぶく〜人民あまきを抜ひ〜ちとす〜田玉の信
ちと抜ひゆ〜あまきあり

○飽海神軍あかいのかみいし

出羽國庄内飽海の社ハ大物忌太神と号ん祭神兼
稻魂神と年々一度凡列〜〜震動〜〜天氣常
に異るる雪霰の中ハ矢の根交り〜降りあり
是を神軍と〜土人大に怖る晴〜後木塩子石
より〜〜識しあ〜〜鏑やぶ矢や暮く股ふホのほ遊あそ敷しあり是
を雷かみ斧きと云廉れん伏ふくの矢の根ねか〜んす〜奥列おく能
列れん力りき中ちゆうニ〜あり常列じょう廉れん能のりも右みぎと云土手つち則すなは奉
草くさホソほそ石いしの雷かみ楔けい雷かみ斧きの類るいひ〜

○龍王祭りゆうおうまつり

淡路國由良の磯乃有西の海中に園り三里をり
の石ありは平生とらふ大石海(さうせ)
うら方三間ありの平なるるあり毎年六
月三日由良の八幡の社僧来り此石のよ子供
物と傳へ祭儀を(せむ)能王を云
あり六時節み玉つゝかの石の色は六の龜
數が群(むら)と集りし海上を塞ぐ祭事色
ぬきむ踏(た)ん忽(たち)ち去(さ)る今(いま)も例年(れいねん)多(おほ)く
安(やす)らむは平(へい)生(せい)とらふ祭(まつり)武(ぶ)文(ぶん)り伴(ばん)

ひし御身所漂(ひま)りし此所(こゝ)に流(なが)れし初(はつ)
より終(はつ)りしと云(い)ふ名(な)あり傳(つた)へし初(はつ)
年(とし)又(また)天(あま)祭(まつり)る

○直會祭

尾張國中嶋郡國府宮清洲毎年正月十
一日(いちにち)正(ただ)しく神(かみ)宮(みや)旗(はた)を立(た)て道(みち)
の色(いろ)も(も)け(け)住(す)ま(ま)人(ひと)を(を)捕(と)ら(ら)ず(ず)依(よ)て
其(その)日(ひ)に諸(もろ)人(ひと)を(を)ば(ば)し(し)旅(り)人(ひと)を(を)旅(り)館(かん)に
て(て)ま(ま)を(を)告(つ)げ(げ)し(し)て(て)留(とど)め(め)し(し)斯(かく)に(に)

とて自然と木のあし捕まらる者も来り其
人を沐浴をせしめ浄衣を著て神前より
乃大ききるる姐板一蒸木をひきまらる庖丁生
勝着をもちきり又人形と作りて捕まらる
人の代とて末那板の上より居るを此傍
より捕まらる人形をひきまらる神前より進出
るの一夜より翌朝神官よりく件の備
物人共も神前よりくく土をひきまらる
ちる鏡餅をひきりて彼人背に負せ青調

一頁文を首おけりて追放走り行てか
た倒る絶入此少時何りて正氣をい元乃
どしどしこれ倒まらる妙小土餅を納る塚と
築りけ神事社家の深秘とん
真清田明神 祭神 因常立尊 當國の一宮也

○人魚

若狭國大飯郡津浅嶽ハ魔利を山八分
より上より人魚の仕者ハ人魚なりと
云つたり宝永年中に見村の桶師漁りて

きふ小岩乃上小所^すは^いく^はと^は居^るそのとを
ま^は頭^を人^間と^して^は襟^は錦^冠の^どく^にむら
くと^は赤^きい^のす^はひ^をれ^り下^は魚^{あり}何
心^をお^ろく^を懼^を以^て守^りま^れと^し則^ち死^せり^は
一^は投^入く^は収^める^をれ^り大^風起^りて^は海^鳴る^一
七^日止^す三^十日^をり^るて^は大^地震^し御^後
嶽^の禁^{より}は^なさ^しま^りて^は地^裂け^りて^は見^村一^石
墮^入り^て是^明神^の崇^とと^して^は

○龍地

生^り雲^の函^秋麻^郡佐^院社^は海^に神^事あり
十^月土^日より^は十^五日^をの^間は^沖より^一尺^をり
乃^は小^蛇一^疋浪^のり^て後^ろあ^らの^蛇金^を以^て
彩^色を^て高^負し^て是^を龍^とし^てあり
神^宮潔^斎し^て汀^を出^るて^は来^りま^るを^は
海^彦を^手に^て交^す小^竜蛇^の彦^の彦^の之^を曲^り
居^るを^則神^前に^進り^て是^海神^{なり}
佐^院社^は敏^らの^や
祭^神伊^弉諾^伊弉^冉の^二神^に十^月八^日陰^神崩^じ

此の月を色ハ諸神この社に集り此の故に
當所ニテ神在月と云

○梅園社

肥前國長崎丸山に富む者有り平日天満宮
を信だ大宰府乃飛梅の枯條を以て聖像を
彫刻し之を朝夕を降を一日途中を以て
只論及教されけり相手をす人をして害し
造るべきも何れ別自教して之りかて教
されしもの爰れどもくにしとて獲生し來

不飯りて之をひを諸り神像を降を以て
飛子又の跡ありそれより血流さう大
惶し是神の我難子代を降を以て
の天神と禰し長岑あり元禄年中の事

○大頭社

大尾社ハ下和田あり

三河國碧海郡上和田村岡崎に大頭社と云
有り深文及青洲百足を長く懸て
口女管へる井の色より社を以て四ツ這を以
て形をかるん後と傳とつひつて人

あつては事とるんは神急は叶ふ人ハ
理せ叶ふざるハ何るもあはれ再々を跡へ
引きてはりありあはれすし○天正年中領主宇
津左衛門五郎忠茂一時獵して山に入一樹の下
ありて依り睡を催し小手鉤の白犬を
咬ては目と寤し又睡は犬頭小枕の上
あり睡眠の妨を恐て腰刀を抜くを依
其首を樹の上の蜘蛛の頭は噛付たり
忠茂是を死す大少驚き而蜘蛛を殺

彼大の忠情を感し両和田村は犬頭大尾
を埋く是を祭る △東君聞召甚感しサセ玉フ

○熱田的射

尾張國熱田社は毎年正月十五日的矢有り
六百人の社家上を射るに一射をせハ
其家を出し官課をせある依り尚社乃
社人年中あはれ是を勵し五寸三寸の
的を常射するあり皆達人とふとふ
其日の的ハ三尺むりりの大的とる事あり

たる教をいかにし時をたぢりすなり非罪を考ふ
とくや是則罪障懺悔の始つるは非乃
方便ありとぞむし婦婦阿りてあまの
男成せしむるをもちて大いなる過つをい
だき男の教をいし小過をばりて大過入
子ふして人目をくらむしを非責をむす
て去るびしおむくの小過をきせしむる
みつりしむる中ひ常の過をいすま
てとらりしがそれぞ罪をそし非まりりて

あまのぶととてり所の人ハちく後とふて
ちとつとを五音相通ちりハモ師抄をそく
すし阿り

伊勢物語むし男女のまじ世をいふぞと相
えり人へのゆゑふ志のびくまのまきえ後は
とく

あまのちか筑摩の祭りとくせんこれあまの過の楚
清補集より 家社志
ねとまた後をのしとんふはく後の過よりおむ

又曰筑摩庄ハ大膳職御厨の地ナリ故ニ御食
津神ヲ祭此神ハ稻食ヲ司ルル子依
ケ里ノ女嫁入の時ノ祭祀ハ鰐釜トシテ
神ヲ進ル

釋教部

佛舍利

大和國平群郡法隆寺の佛舍利ハ十
日一ツ宛敷トシテ十六日ナリ一ツ宛減
ヲ毎日午時ニセツテ瀝ルル庭
ニケル

をす

南無仏の舍利をてをるセウミハ高
天竺ハ米粒トシ舍利トシ佛舍利系
粒トシテ似テ故ニ舍利ト云

慈恩ノ上生經疏云 舍利者稻穀也
馱都者體也

佛躰大小如稻穀ノ量故以爲名矣

聖德太子御父用明帝祈禱のため自
藥師乃像を彫寺を造り然も病不愈
崩御トシテ古天皇十五年寺

院いん之の成就じゆじゆを

寺てら別號べつごうハ七徳寺しちとくじ 聖國寺せいこくじ 宝龍寺ほうりゅうじ

來立寺らいだつじ 鳥路寺とりじ 法隆寺ほつりゆうじ 法隆學問寺ほつりゆうがくもんじ 等ら

法相宗ほつさうしゆ
八宗兼學はつしゆけんがく

○大佛だいぶつ

南都なんと東大寺とうだいじハ聖武帝せいむていの法願ほつがん有り天平十

五年あづまの近江國おんみのくに滋養しやうの地ちに大佛だいぶつをたててたへり同十

六年あづまの子佛像こぶつざう成就じゆじゆを寺てらと建たて安やすんだんに天平

十七年あづまの南都なんとめがきを遷うつす

番匠ばんじやう 稻部百世 益田總干 佛工ぶつこう 国公店くにこうてん 治工ちこう 橋本男玉 高市真店

開元かいげん道師だうし 婆羅門僧正はらもんそうじやう 咒願くわん師し 行基ぎやうき僧正そうじやう

天平勝宝四年ていへいしやうぼうしゆねん四月九日しがつくにち供くわ粮りやう 天子てんし行幸ぎやうきやう

道師だうし 婆羅門僧正はらもんそうじやう 咒願くわん師し 道璿だうせん律師りつし

大佛座像だいぶつざざう高五丈三尺五寸

面長おもてなが一丈六尺いちじやうろくしち 廣九尺五寸ひろくしちご 眉まゆ五尺四寸五分

目長めなが三尺九寸 口くち三尺七寸

鼻長はななが三尺 穴徑あなぢやう一尺 頸くわだ二尺六寸五分

耳長みみなが八尺五寸 螺髮らふり九百六十六 高一尺

頤長一尺六寸

胸長二丈九尺

肘長一丈五尺

掌長一丈三尺

腕長二丈三尺八寸

膝前徑三丈九尺

土蓮花 周三丈七尺 高八尺

花 二百八十枚 周二十丈四尺

肩徑二丈八尺七寸

腹長一丈三尺

臂長一丈九尺

中指 五尺 周り四尺

膝厚七尺

足裏一丈三尺

蓮花銅座 徑二丈八尺 高一丈

基 周り二十丈九尺

治承四年十二月廿八日平重衡の兵火に依て

灰燼とあり後白河法皇源賴朝公并俊兼坊

重源より勅し〜再與重源諸王を勸化し

大仙殿本尊悉成ル

建久六年三月十二日供粮

道師 權僧正覺憲 咒願師 權僧正勝賢

後鳥羽院行幸 源賴朝上洛

番匠 物部為里 佛師 康慶 運慶 定覺 快慶

治工 宋陣和桂 草部是助

佛を降し金洞の入り

黄金 一万四百三十六両 唐鈔 七十三万九千六百六十斤
水銀 五万八千六百二十両 白銅 一万二千六百二十斤
金箔 十五万枚 炭 一万六千六百六十石

○永禄十年松永彈正兵火より回禄しく
御頭焼落り安國の画工山田道安より者賦
宝を拖く是を補延宝の須當寺に僧龍松院
殿造立の大形を相りて勅許台命を奉り

諸國勸進しく堂を立ル

新始千僧粮貞享五年四月二日棟上宝永二年四月

十日堂供粮宝永六年四月八日

別號ハ城大寺 大華嚴寺 恒說華嚴寺

函分寺 金光明四天王護國之寺 三論華嚴 八宗兼学

○京都大仏殿方廣寺ハ天正十四年大岡秀吉公
建立り本尊釈迦の大像ハ華嚴の說法方廣
佛乃躰相をいせりと故に方廣寺と号ス大徳
寺の古蹟和尚をいしくオモイ任せしむられしを
成就せしめて遷化此かより子聖護院道澄
別當職とす慶長元年閏七月大地震に

佛像被壞す秀吉公つゞく仙の知見を以て何
 ぞ其此の破壊と志す所や信成ふたふ云
 々矢を以て是を射給ふ然して後信別善
 光寺の如來と清々此殿の本尊とん時方又
 残暑酷烈なる不佞子飛雲天子満く寒氣人
 と侵は是如來乃崇有りとも秀吉公八月十日
 薨逝丸其前十七日佛と善光寺(還さむその
 後内大臣秀頼公洞像を起し忽んと祈り
 慶長七年海造の日佛の後の中より火出く

堂舎焼失す好くハ堂を建むと善長別先大
 像を被く後子堂を構むと云く雍州府志
 佛軀長十丈 但座檀共

面長一丈八尺 眼 横一尺一寸 竖二尺
 鼻 高五尺五寸 横四尺 鼻穴 二尺
 口 横八尺 竖二尺一寸 耳長一丈
 掌 一丈二尺 指ノ端至 拇 周 六尺一寸
 膝 周 十三丈八尺 足心 一丈四尺 横七尺
 羅 勃 教 三百五十 白毫 徑 二尺
大廿二尺寺

後光 高十八間 横九間

蓮花壇 各八尺

堂棟 高二十五間

桁行 四十五間二尺寸

梁間 二十七間 長谷寺柱 九十二本 徑九尺寸 四間隔立

大觀音

和列泊瀨山長谷寺の本尊ハ十二面觀音立像ニ丈六尺方八尺の巖石を以て座とし江列高嶋郡三尾山の靈水と云く法道仙人と比丘道明カを勤て是を建天平五年五月十八日開眼同十九年堂成就其後數度火を燒ありとも佛恙

或は言辨ハ燒よりありとも御願ハ山上に祀あり燒むより佛工六誓文會誓主勤あり開帳ハ黄一枚開帳又一枚一七日乃開是を開尋常乃開帳ハ帳を下り卷り此ハ上より卷あり半身と并

相列強倉海光山長谷寺 淨土宗 本寺十一面觀音立像ニ丈六尺二分和列長谷寺の奉寫此本を以て佛師春日造之毎年六月十七日會日參詣群集す 坂東順禮四番

壇の模倣を凡ふ今境域の清涼院より元亨釈書
大念佛 毎年三月九日より十音に至る弘安二年始
御身拭 毎年三月十九日

孝寺蒿融大臣の山庄棲西段觀より貞觀年中
子改く寺と空海に賜ふ住持恒寂と以祖と

○善光寺如来

信列水内郡芋井御善光寺の奉養不欽明天
皇十年草創しく伊弉郡日玉宇沼村に寺と
建ル其後皇極天皇元年に仏勅に依り水内郡

又建立し終に奉願主本田善光依て寺号を
凡世子靈社冥佛多しとて他國遠境より信
を祭して多しとて小参詣をるに伊弉郡安土
奉養の時より毎日旭の時に田中より交は帳
をと掲ぐ時は大会仏を参詣の業は時を以てあ
るを矩換とせり日毎に百人言人乃参詣
御堂に満り其地乃人の稀なり皆旅人なり
かきくくきし冥孫の中あはれをいもじ享保年中
江戸深川の人目を病く盲よりけ奉養に祈誓

して四十八夜歩^あをこし運^{たこ}ふ石^{いし}の祭^{まつり}す^あはす^す
西^{にし}眼^{まなこ}あきくふ開^{ひら}き^きたりその持^も処^{ところ}の杖^{つゑ}件^{けん}の熟^{じやく}意^い
を記^しし^く繪^え馬^ばあり^し法^ほ堂^{だう}と掲^かげ^け置^おき^きたり毎月^{まいげつ}衆^{しゆ}
詣^よむれと住^{ぢゆう}還^{えん}驛^{えき}の者^{もの}悉^{しつ}其^{その}人^{ひと}を^し知^し
諸^{しよ}國^{こく}諸^{しよ}佛^{ぶつ}の冥^{めい}誕^{たん}多^たく^しと^して^し事^{こと}繁^{はん}ぶれ^ぶる^る省^{しやう}之^し

○石羅漢

○^副 豊^{ゆん}後^ご國^{こく}者^{しや}岷^{しん}山^{さん}羅^ら漢^{かん}寺^じ曹^{そう}洞^{どう}宗^{しゆ}也^{なり}宇^う佐^さ乃^{なり}
八^は幡^{ばん}より^り八^は西^{せい}北^{ぼく}より^りあ^まり^つり^つ五^ご里^りに^んと^して^し釈^{しやく}迦^か文^{ぶん}殊^{じゆ}
普^ふ賢^{けん}五^ご百^{ひやく}羅^ら漢^{かん}千^{せん}躰^{たい}の地^ち蔵^{ざう}と^しち^ちり^りの三^{さん}千^{せん}七^{しち}百^{ひやく}

体^{たい}の諸^{しよ}佛^{ぶつ}皆^{みな}石^{いし}の佛^{ぶつ}あり^し園^{えん}山^{さん}園^{えん}龕^{こん}禪^{ぜん}師^し
是^{これ}を^し開^{ひら}時^{とき}也^{なり}逆^{さか}流^{りゆう}徒^た順^{じゆん}と^して^し仙^{せん}人^{にん}來^きり^り力^{りき}を^し
合^あ七^{しち}一^{いつ}夜^や乃^{なり}中^{ちゆう}成^{じやう}就^{じゆ}と^し云^い

○又大^{だい}和^わ國^{こく}壺^か坂^{さか}の^のひ^ひが^が八^は所^{しよ}が^がけ^けは^は高^{かう}香^{かう}山^{さん}あり^し
石^{いし}に^に刻^{きつ}む^む石^{いし}の^の五^ご百^{ひやく}羅^ら漢^{かん}千^{せん}体^{たい}仏^{ぶつ}と^し云^い 兩^{りゆう}部^ぶの^の曼^{まん}陀^た羅^ら
架^かあり^し奇^き買^{かい}の^の巧^{かう}と^して^し凡^{ぼん}作^{さく}は^はあり^し

○又^{また}ち^ちり^り後^ごの^の玉^{ぎよく}龍^{りゆう}聖^{せい}の^の近^{きん}石^{いし}菘^{しゆ}村^{むら}凡^{ぼん}生^{せい}村^{むら}の^の石^{いし}の^の谷^{たに}
石^{いし}像^{ざう}の^の五^ご百^{ひやく}羅^ら漢^{かん}あり^し是^{これ}は^は今^{いま}の^のう^うらん^{らん}は^はい^い

○鬼押

鏡方列津の観音堂は毎年二月朔日修法あり
て鬼押しとありて本堂の海中より四況の
像ありむし竜神是をとりて奪り来り
しと追まひりり争ひありと云り赤青の鬼
乃面着る者二人異形の装束をしきせ左
右の手引とて究竟の力者二人宛相従ひ各
手木をし推し入り後ふ又一人禰熊を被り
もの入流し常にたぐりて其鬼前後は連り堂
乃外をしめさるり三盃んたり浦方濱方の者

も教百人櫃の棒をし手こもちて三夜の間内
よかの鬼を打ちたり左右の手引屍符等ハ敵
手をし押し先鬼斗を敵打ちたり左右の手引共
手木を以て棒をしし中よ打せざるあり
いともいとも鬼を強く敵も其年かあるに
漢多し打得ざれば少しといふも守命を
押しまん打んたるものしをる件ノ鬼ハ産ま
人をもとし打救さきしうも遠近ありと
きまのこゆる同日所中をハ浴衣一夜に髪を

乱し陣巻を―按矛の真鍮を持十人或
二十人けりづ一む身くふよいくくよふて
歩行あり是をす龍神を退退言退
凡有り俗観音祭りと云

○金印

相列小田原最兼寺の金印八開山有菴和尚三治
明神の告も依く地中より堀を所の神聖之

其蹟金剛水
号ス妙井ナリ



未を以歟之佛菩薩の名号
呈に又印斗もあり印真不定

此寺を安持をれを天行病魑魅凶函を避
夜行ハ印ハ二人の具印三ツ有ハ山絨悪黙の
眼を々四人を傳ふと名ありと云り○一年江戸傳
言可急の縮布を商者上列へ元買よりきふ
深谷本庄の間まきく夫の強盗かあ元来以
男多術を傳ふれハスハうを子と負て逃去
跡ハ五人の盗人ハ道のまきの松林と相争とて
飛躍切合風情あり―が是もも退去と云
うと助りもる後ハ案をれハ共押する金印

夜雷乃とある破きより白山の岡山泰澄和尚塔
のかいこふ座して法華を誦するは大きき雷
く雲中より可童男がらおどろのどくふと縛
らまは落く和尚お教を乞て曰我ハ山の地神あり
塔あり時と任不あり故は是を壊をり于時
泰澄よくい山は水あり汝冷泉をい出さべし又
方四十里雷乃声をいり命をい跪く諾は即縛
を解く神童指を以く石巖をい鑿き清泉
涌出は又方四十里子雷霆せん六のり今に至る

かゝる泰澄ハ誠前麻生津の産父ハ安角母也
伊野氏之夢は白玉懐中ふるとえく乃あり白鳳十
一年誕む世俗越の大徳と稱せり平日頭乃上は
金の光り現むとて病あり者其禱の飯を食は
まハ痊とふりかゝ常ふ鬼神とつとふと云へり

三猿堂

比叡山の三猿堂ハ傳教大師天台不見不聞不言
を以三諦を表して土の猿を作り石の猿
石の猿の和語を以猿比形と云又申の字後も有

見事ききたる所もよくつけも相とありてつあれもせず
取ら乃康申塚母け形を築く申のしひえ

里人於一之終

水田氏所藏

